

[研究報告]

熊本保健科学大学における学生の喫煙に関する実態調査

岩村 健司^{1,*} 三村 孝俊² 嶋田 かをる² 中村 京子³
荒尾 博美³ 鏑木 誠⁴ 益満 美寿⁵

Survey on students' smoking status at Kumamoto Health Science University

Kenji IWAMURA, Takatoshi MIMURA, Kaoru SHIMADA, Kyoko NAKAMURA,
Hiromi ARAO, Makoto KABURAGI, Yoshihisa MASUMITSU

〔和文抄録〕

熊本保健科学大学（以下、本学）は、2008年から防煙対策のプロジェクトチーム（PJT）を発足し、敷地内全面禁煙を達成するなど、喫煙の問題に積極的に取り組んできた。今回、本学におけるさらなる喫煙対策と防煙教育の充実を目的に、無記名自記式調査にて本学に所属する学部生1,479名を対象に喫煙に関する実態調査を行なった。調査の内容は1) 回答者の属性、2) 喫煙の状況、3) 禁煙に関する教育と知識、4) タバコと健康被害の認識、5) 加濃式社会的ニコチン依存度質問票の5項目に大別して行った。

その結果、有効回答数は1,201名（81.2%）、全学生の喫煙率は2.5%（30名）であった。また、はじめて喫煙した年齢は「20歳」が26名（40.3%）と最も多く、次いで「10～15歳」（17.9%）であった。さらに喫煙歴のある67名について分析したところ、喫煙のきっかけは、「友人の影響」が最も多く、次いで「好奇心」、「同級生や先輩の影響」が多かった。

社会的には喫煙による影響の理解が広まりつつある中、友人関係や学生生活の影響で、喫煙を始める学生が少なからず存在することが示唆された。今後は、タバコの実態や喫煙による影響を伝える防煙教育に加え、本人を取り巻く環境も考慮した関わり方が重要であると考えられる。

キーワード：大学生、たばこ、喫煙、防煙教育

I. はじめに

たばこの健康に対する影響は、1950年代の疫学研究によって指摘されたことに始まり、それ以降、世界保健機構や米国および英国などで、喫煙が生活習慣病の危険因子として、数多くの報告が行われている¹⁾。

我が国においても、2003年に健康増進法が施行されてからは、各公共施設における全面禁煙が進められるなど、積極的な禁煙への対策が取り組まれている。また、近年、厚生労働省は、2020年に開催される東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会に向けて、他人のたばこの煙にさらされる受動喫煙対策として喫煙者本人や施設管理者へ罰則

所属

¹熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科 言語聴覚学専攻

²熊本保健科学大学 保健科学部 医学検査学科

³熊本保健科学大学 保健科学部 看護学科

⁴熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻

⁵熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科 生活機能療法学専攻

*責任著者：iwamura@kumamoto-hsu.ac.jp

付きで学校（小・中・高等学校）や医療機関を『全面禁煙』とする初の制度案を発表するなど、より一層の対策強化が進められている²⁾。

本学も、2008年から防煙対策のプロジェクトチーム（以下、PJT）を発足し、喫煙問題に関して、防煙授業、禁煙デーのイベントなどの禁煙啓発について積極的に行ってきた。これら活動を通じて、2010年には『敷地内全面禁煙』を達成するなど、禁煙対策の成果をあげている。

今回、本学におけるさらなる喫煙対策と防煙教育の充実を目的に、本学学生（以下、学生）を対象にして、たばこに関する認識・知識といった実態を把握するために調査を行ったので、その結果を報告する。

Ⅱ. 方法

1) 対象 2016年度10月時点で本学に在籍している学生（休学者を除く）1,479名

2) 無記名自記式質問紙調査

3) 調査期間 2016年10月～12月末日

4) 調査の方法と内容

医学検査学科、看護学科、リハビリテーション学科各専攻の学生に説明し、各学科の研究分担者が配付回収を行った。調査項目は次の通りに作成した。

(1) 属性（所属・性別・年齢）

(2) 喫煙歴の有無、喫煙歴のある学生への質問項目（動機・開始時期・現在の喫煙の有無・現在の喫煙本数・喫煙場所・喫煙時間帯・喫煙時の配慮・喫煙に対する意識と行動・禁煙への関心）

(3) 禁煙に関する教育と知識

(4) たばこの健康被害の認識

(5) 加濃式社会的ニコチン依存度調査票(KTSND)によるたばこへの認識

5) 分析方法

回答結果は記述統計を用いてまとめた。

6) 倫理的配慮

本研究調査にあたっては、事前に本学大学倫理審査会の承認（承認番号：2016-24）を受けて実施した。調査にあたっては各学科と専攻において、研究の趣旨・方法について記述した説明文書に基づき口頭で協力依頼を行い、学生の自由意思に基づいて回答を求め、回答用紙の回収を以て同意を

得たとした。調査・分析や論文作成時には、個人が特定されないようにすること、回答の拒否、回答途中での回答の中断があっても不利益は生じないように留意し、本研究の集計結果は個人情報保護のため、研究代表者が回答用紙を管理し、抽出したデータはセキュリティーのかかったフォルダーに保存した。

Ⅲ. 調査結果

1. 調査対象、アンケート回収率及び有効回答者数

対象学生1,479名のうち、回答者は1,280名（回収率86.5%）、分析に必要な項目が未記入であった学生を除外した有効回答数は1,201名（81.2%）であり、学科専攻別の有効回答数（率）は、医学検査学科428名（90.5%）、看護学科317名（69.7%）、理学療法専攻163名（86.2%）、生活機能学専攻151名（80.3%）、言語聴覚学専攻142名（81.6%）であった。

2. 有効回答学生の属性（性別・年齢）

性別および年齢別内訳は、男子学生305名、女子学生896名であった。年齢構成は、18歳123名、19歳291名、20歳273名、21歳261名、22歳214名、23歳31名及び23歳以上が8名であった。

3. 本学の禁煙・分煙対策の認知について

本学における禁煙・分煙対策について、「とられている」と回答した学生は1,075名（89.5%）であり、「特にとられていない」26名（2.2%）、「わからない」100名（8.3%）との結果であった。「特にとられていない」、「わからない」と回答した126名の性別内訳は、男子学生37名、女子学生89名であった。また、所属別内訳は、医学検査学科8.8%、看護学科11.0%、理学療法専攻18.0%、生活機能療法専攻15.9%であった。

4. 本学における喫煙学生の状況

1) 本学の喫煙率について

現在、本学学生の喫煙状況は、1,201名中30名（2.5%）であった。学科別にみるとリハビリテーション学科73%（3専攻合計）、医学検査学科20%、看護学科7%の順に喫煙学生が多い結果となった（図1）。

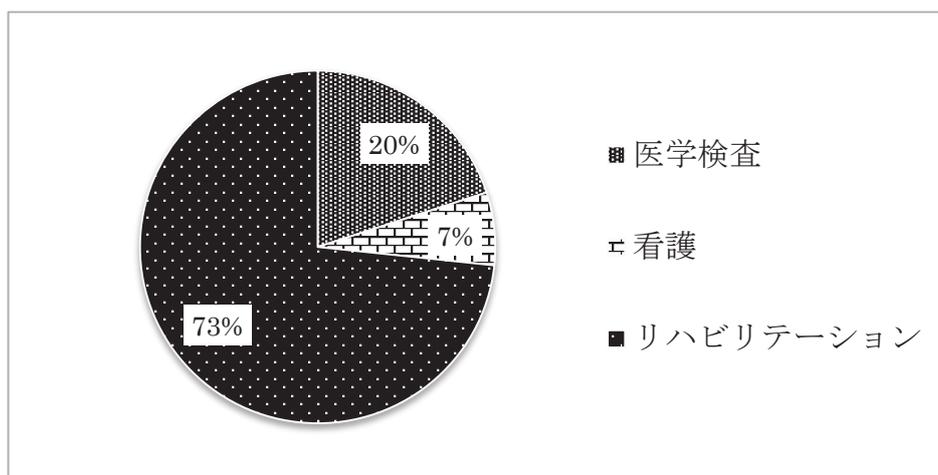


図1 学科別の喫煙率 N = 30

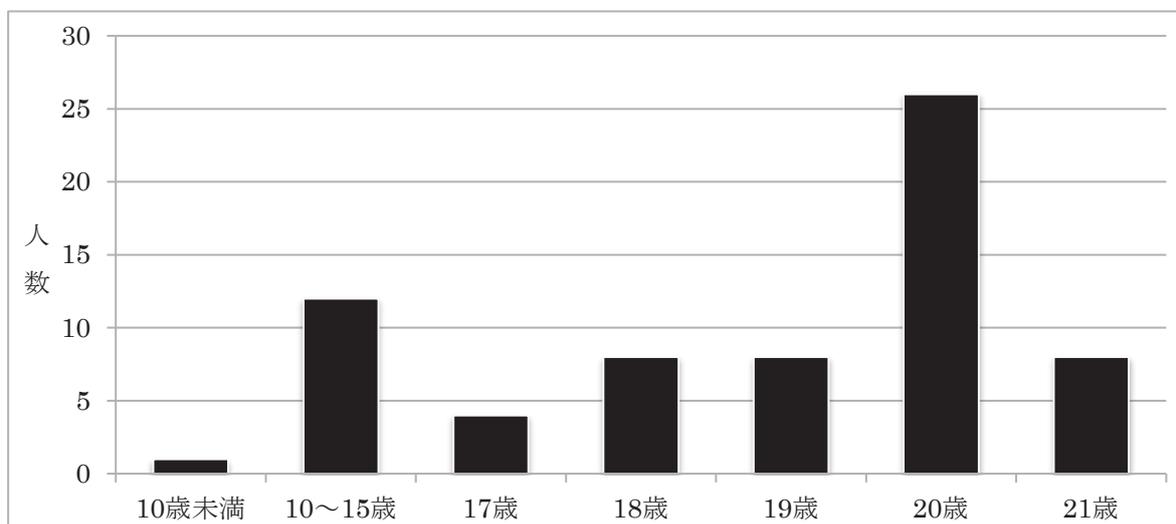


図2 喫煙をはじめた年齢 N = 67

2) 同居者の喫煙について

同居者の喫煙状況については、同居家族に喫煙者が「いない」は695名(57.9%)、「いる」は260名(21.6%)を示し、「同居家族がいない」と回答した学生は246名(20.5%)であった。また、同居者がたばこを吸っている260名の中で「毎日吸う」と「時々吸う」を喫煙者とした場合、計8名の3.1%となった。以下「同居者がたばこを吸わない」は695名中計16名の2.3%、「同居者はいない」は246名中6名の2.4%となった。

3) 喫煙経験の初年齢について

今までに喫煙経験があると回答示した学生は67名(5.7%)であり、はじめて喫煙した年齢を図2に示す。年齢別にみると「20歳」が26名(40.3%)と最

も多く、次いで「10～15歳」(17.9%)であった。

4) 喫煙のきっかけについて

たばこを吸ったきっかけを図3に示した。「友人の影響」が最も多く、次いで「好奇心」「同級生や先輩の影響」が多かった。

5) 過去の禁煙経験について

喫煙経験のある67名に対し、禁煙経験の試みについて質問した結果を図4に示す。「禁煙して成功した」36名(53.7%)が最も多く、次いで「禁煙を考えたことはない」11名(16.4%)であった。

また、「禁煙を試みたことがあるが成功しなかった」「禁煙を考えたことはあるが何もしなかった」

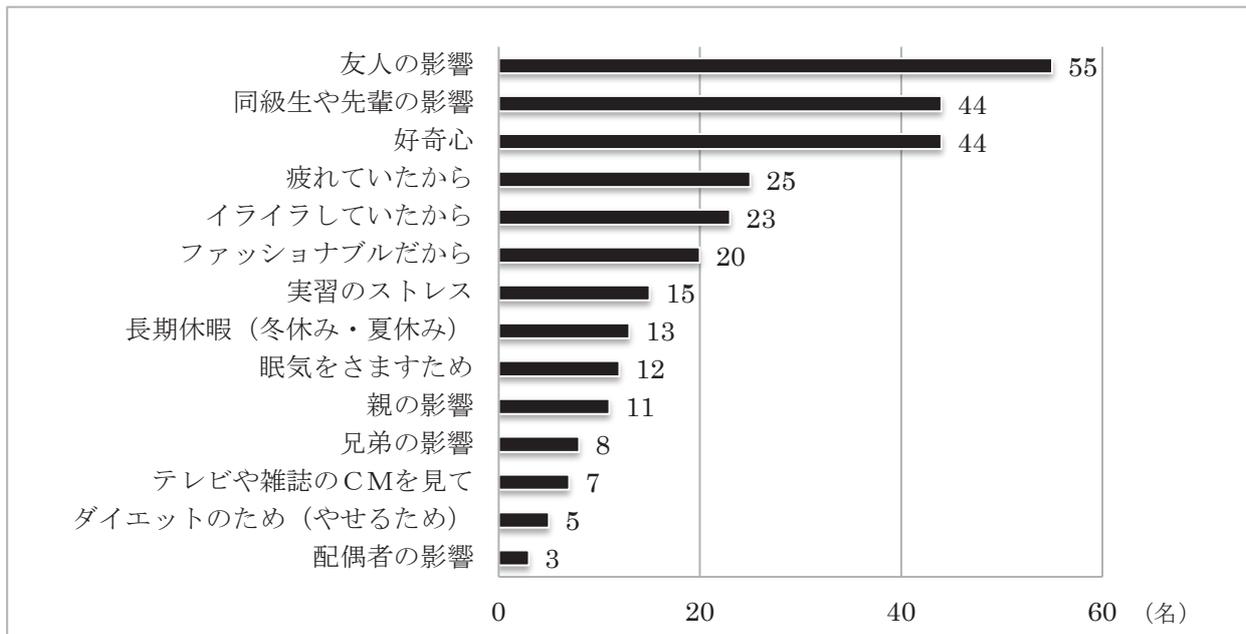


図3 喫煙を開始した理由 N = 67

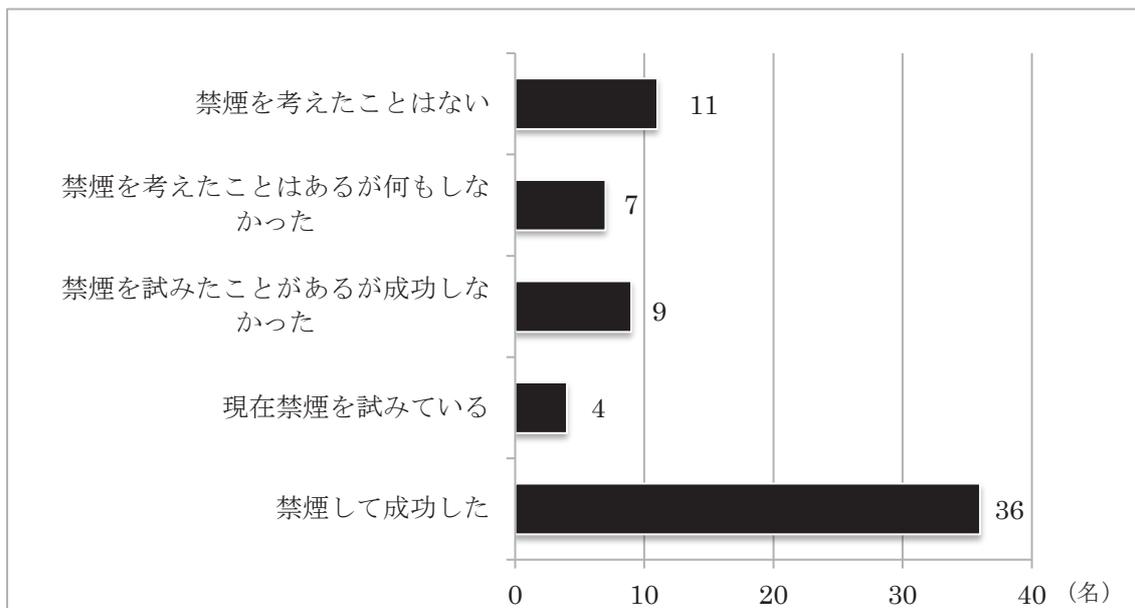


図4 禁煙の試みについて N = 67

を合わせると、16名 (23.8%) であった。

6) 禁煙を試みた理由について

これまでに禁煙を試みたあるいは考えのあった56名に、その理由を尋ねたところ、「健康に悪い」が最も多く、次いで「他人に迷惑がかかる」「たばこ代がかかる」であった (図5)。

また、現在の喫煙状況は、「現在は吸っていない」37名 (55.2%) が最も多く、「毎日吸っている」18

名 (26.9%)、「時々吸う」12名 (17.9%) であった。さらに、禁煙が継続できている37名について、禁煙を開始した年齢を質問したところ、「20歳」15名 (40.5%) が最も多く、次いで「18歳未満」「21歳」「22歳」の順に多かった。

7) 喫煙習慣について

(1) 起床から喫煙までに要する時間

毎日喫煙している学生では77%が、起床後1時間

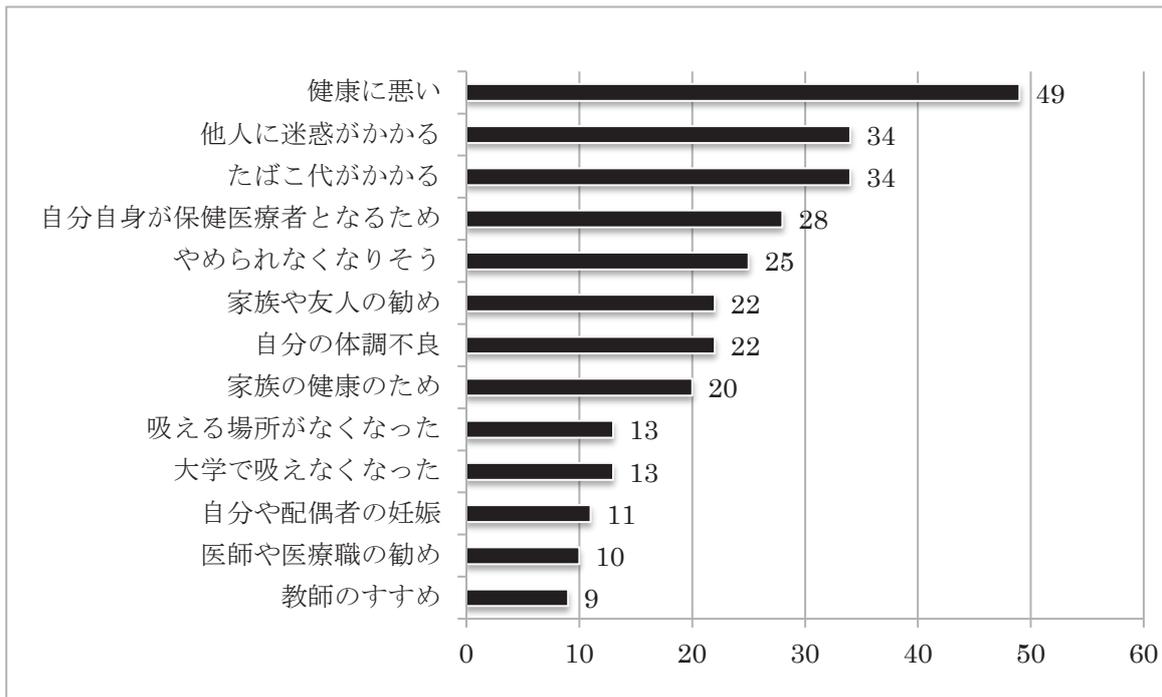


図5 禁煙を試みた理由 (複数回答可) N = 56

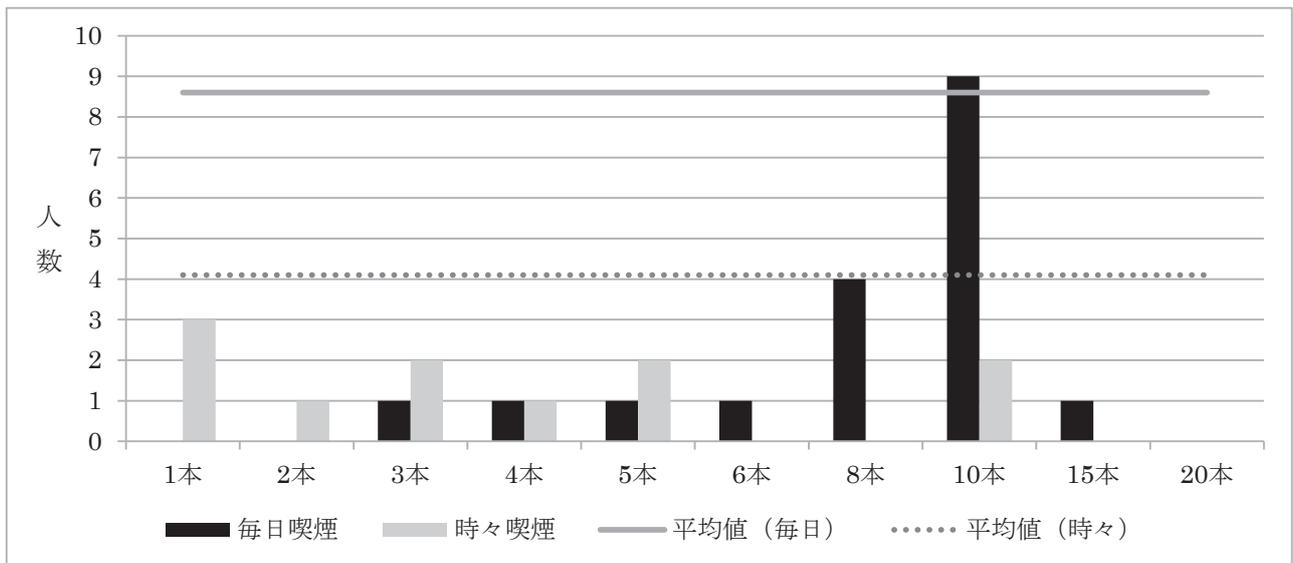


図6 1日の喫煙本数 N = 30

以内に喫煙しており、喫煙を時々している学生では82%が2時間以上との回答であった。

(2) 喫煙せずに1日を過ごすことについて

毎日喫煙している学生では「とても難しい」「難しい」が合わせて67%であった。時々喫煙している学生では「とても難しい」「難しい」と答えた学生はおらず、「やさしい」「とてもやさしい」が100%という結果であった。

(3) 1日の喫煙本数について

毎日喫煙している学生では平均8.6本で、時々喫煙している学生は平均4.1本であった(図6)。

(4) 喫煙の動機について

喫煙の動機について、毎日喫煙している学生は「自分を元気づけたいとき」以外のすべての項目で強く吸いたくなる傾向が見られ、特に「酒を飲んだ時や食後に強く吸いたくなる」との回答が多かった。

一方、時々喫煙している学生では、酒や食後については半数程度が「強く吸いたくなる」と回答して

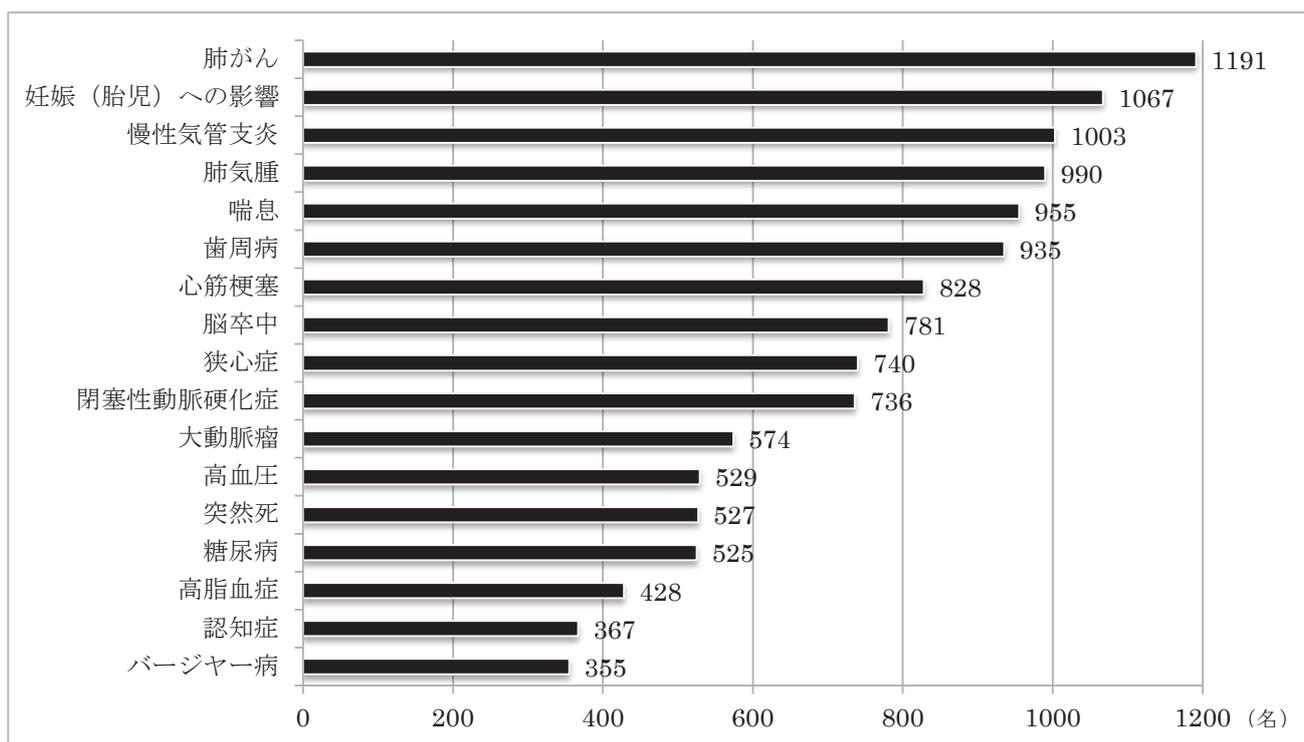


図7 喫煙者の健康被害意識 N = 1,201

おり、次いで「イライラしたとき」、「憂鬱や不安を忘れたとき」に強く吸いたくなるとの結果であった。

8) 喫煙を行う場所について

毎日喫煙している学生に、たばこを吸う場所を尋ねたところ、「自宅の屋外」「大学の敷地外」「飲食場所」が26%、「通学途中」16%の順であった。

9) 禁煙への意識について

禁煙への興味について質問したところ、毎日喫煙している学生で、「ない」又は「今すぐに禁煙しようと考えていない」と回答した学生は94%、時々喫煙している学生においては86%であった。

10) 喫煙者が保健医療従事者として禁煙指導を行うことについて

喫煙者が保健医療従事者として禁煙指導を行うことについての考えについて、「自分の喫煙とは関係ない」との回答した学生は、毎日喫煙している学生が56%、時々喫煙している学生82%であった。

6. 本学学生における喫煙による健康被害とその意

識について

1) 健康被害の認識について

喫煙学生自身に健康被害を及ぼす疾患の認識として、「肺がん」「妊娠(胎児)への影響」「慢性気管支炎」「肺気腫」「喘息」の順に多かった(図7)。

また、受動喫煙による健康被害を及ぼす疾患の認識として、「肺がん」「妊婦(胎児)への影響」「喘息」「肺気腫」「慢性気管支炎」の順に多かった(図8)。

2) 喫煙に関する価値観について

喫煙に関する価値観については「胎児や子どもの健康のために、喫煙すべきでない」「自分の健康上、喫煙は好ましくない」は約9割、「女性の喫煙は好ましくない」は約6割が、強くそう感じているとの結果であった。

また、保健医療従事者に対する価値観については、「喫煙は好ましくない」は約9割、「喫煙は自由である」は約7割、強く感じていた。さらに、「保健医療従事者であることと喫煙は関係ない」との質問に約6割が「いいえ」と回答している(図9)。

3) 喫煙に関する教育と情報について

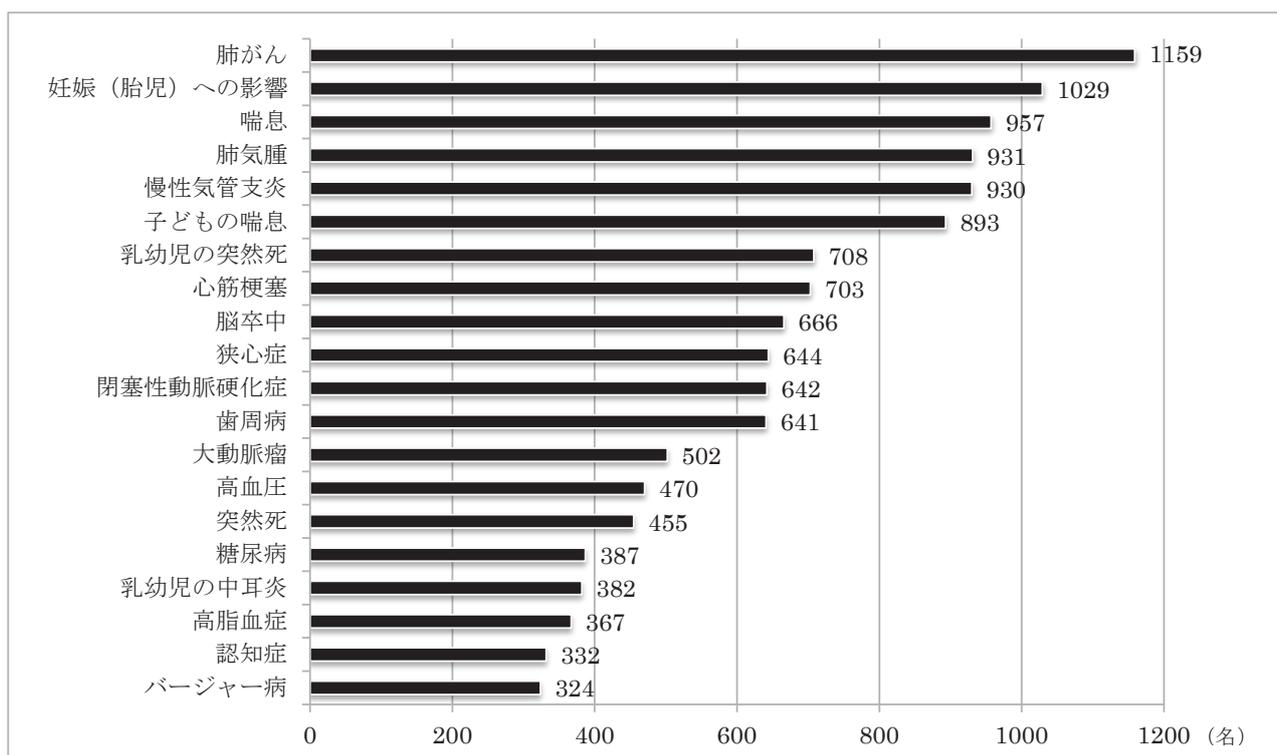


図8 受動喫煙者の健康被害意識 N = 1,201

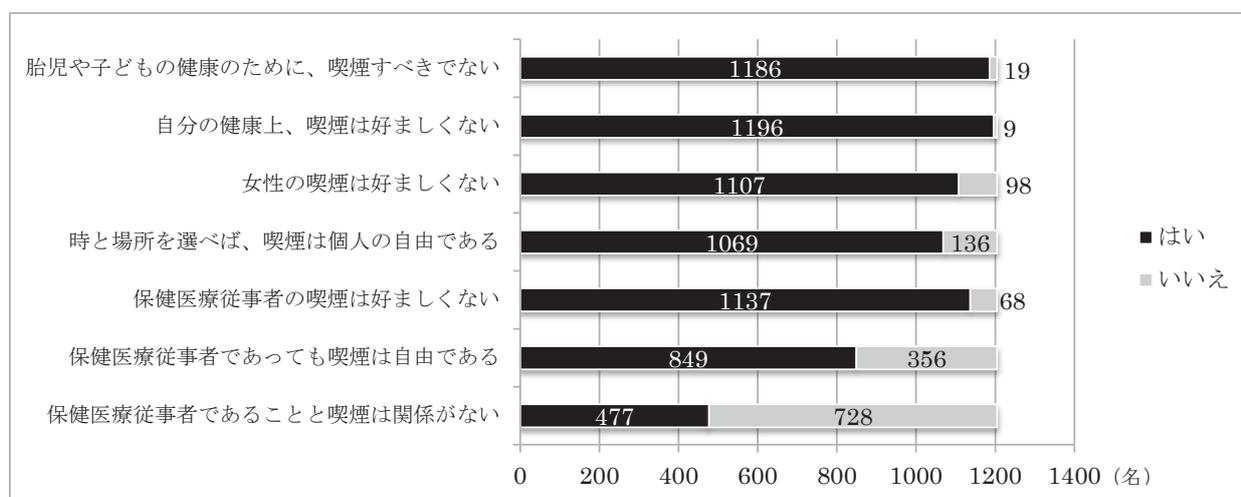


図9 喫煙に関する価値観 N = 1,201

9割の学生が過去にたばこの害についての教育を受けたことがあるとの回答であった。また、喫煙に関する知識や情報については、「たばこが社会に及ぼす影響」「人の吸ったたばこの煙の影響 (受動喫煙) でかかりやすくなる疾病について」「禁煙プログラム、ニコチンパッチ・ガムなどの補助手段、支援組織の情報」の順に多かった (図10)。

4) 加濃式社会的ニコチン依存度調査票による設問

社会的ニコチン依存は「喫煙を美化、正当化、合理化し、またその害を否定することにより、文化性を持つ嗜好として社会に根付いた行為と認知する心理状態」と定義されている。加濃式社会的ニコチン依存度調査票 (The Kano Test for Social Nicotine Dependence; 以下 KTSND) は、社会的ニコチン依存の程度を数値で表現する簡易質問票である^{3) 4)}。この質問票は喫煙者、非喫煙者に関係なく回答することが可能であること、総得点が高いほどたばこ製

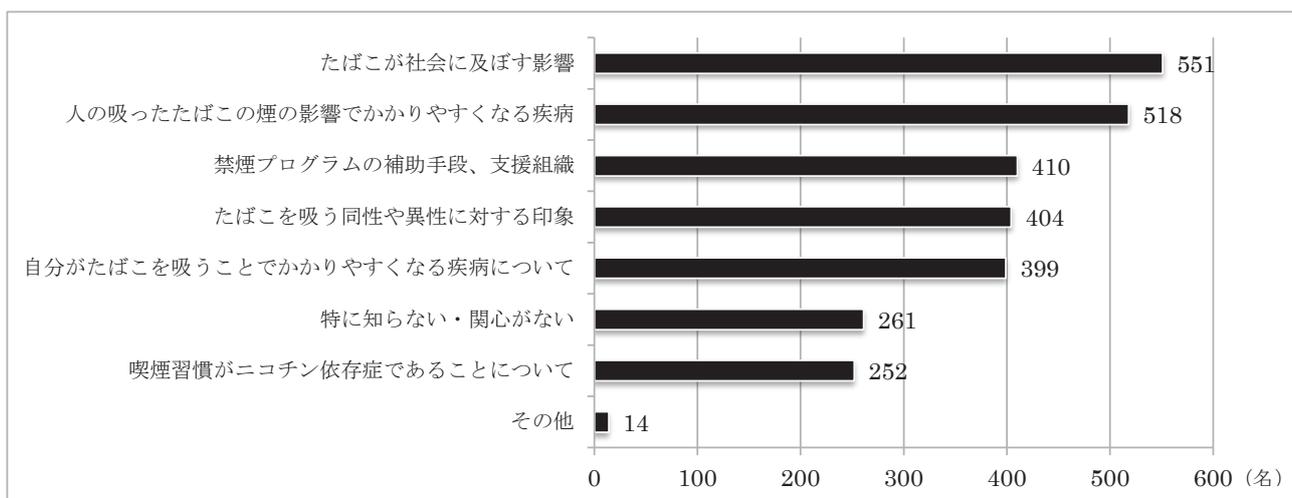


図10 喫煙に関して知りたいと思っている情報 N = 1,201

品や喫煙を許容、肯定、容認する意識や態度が高いとされている。また、吉井ら(2007)⁴⁾は、KTSNDの9点以下を正常範囲としている。

本学で得られた結果を、性別で比較すると、男子学生13.0、女子学生は11.1という結果であった。また、学科別では、医学検査学科 11.0、看護学科11.8、リハビリテーション学科12.1と学科間において、特に差は認められていない。

また、喫煙の有無にて比較したところ、非喫煙学生は11.3、喫煙学生は16.9という結果を示しており、非喫煙学生においても、KTSNDにおける正常範囲よりも、高い値を示す結果となっている。

IV. 考察

1. 本学学生における喫煙行為に関する認識

今までに喫煙歴がある学生は67名(5.7%)であり、はじめて喫煙した年齢は「20歳」が26名(40.3%)と最も多く、次いで「10～15歳」(17.9%)であった。前回の調査⁵⁾では、はじめて喫煙した年齢は「10～15歳」が最も多く、次に多いのが男性では「18歳」、女性では「19歳」であった。喫煙の開始年齢について上昇がみられる一方、今回の調査では20歳前後に開始されている点を考慮すると、大学の在学中に喫煙を開始したことが考えられる。また、自身の健康への影響などを理由に、禁煙を試みたが上手くいかなかったものが16名(23.8%)存在しており、喫煙が一旦はじまると、習慣化が進み、禁煙が難しくなるため、大学入学時から徹底して介入することが必

要であることが示唆された。

また、本学における禁煙・分煙対策については、1,075名(89.5%)と大半の学生は認識していたものの、「特にとられていない」26名(2.2%)、「わからない」100名(8.3%)との回答も見られており、前回の調査⁵⁾と比較しても、喫煙問題への無関心の者が、一定数存在することが分かった。今後も、徹底した喫煙問題や禁煙に関する啓発活動を行う必要があると考えられる。

2. 本学学生における喫煙に関する健康被害に関する認識

学生のたばこに関する価値観は、たばこの健康被害について受けてきた教育によって得られた知識に基づき、ほとんどの学生が、「胎児や子どもの健康のために、喫煙すべきでない」、「自分の健康上、喫煙は好ましくない」と認識しており、喫煙に関する教育が普及していることが示唆された。しかし、健康被害を及ぼす具体的な疾患についての知識は、「肺がん」「慢性気管支炎」「喘息」など心肺機能・呼吸器系疾患に偏っている傾向がみられており、糖尿病や高脂血症、認知症など、様々な疾病や広範囲にわたり健康被害を引き起こすことについて認識が低い可能性が考えられた。

また、保健医療従事者の喫煙に関して、看護学生を対象とした先行研究報告⁶⁾と同様、「喫煙は好ましくない」としながらも、「喫煙は自由である」という意見が多く、「保健医療従事者であることと喫煙は関係ない」と回答する学生も過半数おり、比較

的、喫煙に対する寛容な態度がうかがえた。

学生は、これまでの学校教育の中で、防煙教育を受講したり、日々生活の中でマスメディアやインターネット情報などからたばこの健康被害に関する知識を得たりして、たばこの害についての教育を受けていた。しかし、たばこの害については、能動喫煙や受動喫煙、そして、禁煙方法に関する情報に偏っており、その他の情報については、あいまいな知識と認識を有する状態であると考えられる。

今後はこれら現状を鑑みて、喫煙を個人の問題として捉えるのではなく、受動喫煙などの一般化した知識のみならず、喫煙と社会・経済との関係性など幅広く、情報を提供する必要がある。

3. 本学学生の喫煙状況と防煙教育の在り方

本学学生の喫煙者は、1,201名中30名(2.5%)であった。また、今までに喫煙歴があるとの回答を示した学生は67名(5.7%)との結果であった。これは厚生労働省による平成27年国民健康・栄養調査(以下、国民健康・栄養調査)において、「毎日吸っている」または「時々吸う日がある」と回答した20代の習慣的喫煙学生の割合の18.2%と比較しても⁷⁾、本学学生の喫煙率は、かなりの低率を示している。これは、近年のたばこ離れや社会的な心象の影響などから、嫌煙傾向に結びついた可能性も推察できる。

次に、「喫煙歴がある」および「現在も喫煙している」と回答した67名について分析したところ、喫煙のきっかけは、同居家族の喫煙習慣の影響は少なく、「友人の影響」が最も多く、次いで「好奇心」「同級生や先輩の影響」が多かった。

また、KTSNDによる評価において、非喫煙学生が11.3と正常範囲よりも高い値を示す結果となっており、喫煙に対して比較的寛容な態度であることが分かった。

三村(2016)が行った大学教職員向けの調査⁸⁾においては、大学から吸い始めたと回答した教職員が最も多くかった。

以上のことから、喫煙が若年時に友人の影響を受けて吸い始めた場合、習慣化しやすい可能性があることが示唆される。

さらに、日常的な喫煙への動機をみると、飲食後の満足感を増幅させたい時やイライラ、憂鬱、不安といった精神的な安定感を求める場面で強く吸いたくなる傾向が見られている。

このことから、たばこの実態や喫煙による影響を伝える防煙教育は大学入学時に徹底して行う必要があることに加え、友人関係や学生生活といった本人を取り巻く環境も考慮した関わり方が重要となることが示唆される。

IV. おわりに

今回行われた調査を通じて、防煙授業、禁煙デーのイベントなどの本学が積極的に進めてきた喫煙対策について、一定の成果が見られたことがうかがえた。しかしながら、学生間では、喫煙に対する寛容な態度がみられていること、友だちから勧められることにより喫煙につながっていることも傾向として見られている。

今後は、喫煙学生個人や喫煙を予防するための「防煙対策」だけでなく、「たばこを勧める友人や周囲の人物」に関する対策として、「勧煙対策」も必要である点を鑑み、今後も引き続き、喫煙に対する啓発活動を実施し、防煙につながるような活動を進めていきたい。

謝辞

この研究調査は、平成28年の熊本保健科学大学教育研究プログラム・拠点研究プロジェクトの助成を得て実施致しました。大学からの支援を得て調査研究が実施できたことに深く感謝し、この調査結果や貴重な意見を本学の禁煙対策・防煙教育に活用したいと考えます。本調査にご協力いただいた本学学生の皆様方に深く感謝致します。

なお、本研究における利益相反は存在致しません。

*本稿の一部は、第12回日本臨床検査学教育学会学術大会(2017年8月、埼玉県立大学)において発表⁹⁾した。

【引用文献】

- 1) 中島素子, 森河裕子, 浜崎優子: 大学敷地内全面禁煙と喫煙習慣獲得に関する検討, 学校保健研究. 2013; 55; 396-401.
- 2) 厚生労働省健康局健康課健康情報管理係: たばこ健康に関する情報ページ,

- http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/tobacco/index.html (2017年8月21日検索)
- 3) Yoshii C, Kano M, Isomura T, et al. An innovative questionnaire examining psychological nicotine dependence, "The Kano Test for Social Nicotine Dependence (KTSND)". J UOEH 2006 ; 28 : 45-55.
- 4) 吉井千春, 加濃正人, 稲垣幸司ほか: 加濃式社会的ニコチン依存度調査票を用いた病院職員(福岡県内3病院)における社会的ニコチン依存の評価. 禁煙会誌 2007 ; 2 : 6-9.
- 5) 三村孝俊, 嶋田かをる, 多久島寛孝, ほか: 熊本保健科学大学学生の喫煙実態調査. 保健科学研究誌 2009 ; 6 ; 15-22.
- 6) 吉田広美, 柳川育子: 看護学生の喫煙に関する認識と禁煙・防煙意識の向上にむけて-看護学生に対するたばこ調査の結果から-. 京都市立看護短期大学紀要 第31号 133-141
- 7) 厚生労働省: 平成27年国民健康・栄養調査.
- 8) 三村孝俊, 中村京子, 嶋田かをる, ほか: 熊本保健科学大学教職員の喫煙実態調査. 保健科学研究誌 14 ; 2017 ; 139-148.
- 9) 三村孝俊, 嶋田かをる, 中村京子ほか: 熊本保健科学大学の禁煙対策-本学学生に対する喫煙実態調査-. 臨床検査学教育 第9巻補冊 ; 2017 ; 60.

(平成29年12月4日受理)

Survey on students' smoking status at Kumamoto Health Science University

Kenji IWAMURA, Takatoshi MIMURA, Kaoru SHIMADA,
Kyoko NAKAMURA, Hiromi ARAO, Makoto KABURAGI,
Yoshihisa MASUMITSU

Kumamoto Health Science University launched a project team for smoking prevention in 2008 to achieve smoking cessation on the university campus. Since then, it has actively addressed the issue of smoking at the university. To further improve smoking prevention efforts and education at our university, we surveyed 1,479 undergraduates at the university using a self-report questionnaire survey on smoking practice. The survey collected data on (1) the attributes of respondents, (2) smoking status, (3) education and knowledge on smoking cessation, (4) recognition of tobacco and health hazards, and (5) the Kano test for Social Nicotine Dependence. The survey was carried out roughly. The number of effective responses was 1,201 (81.2%) , and the smoking rate among all students was 2.5% (n=30) . The most common age at which respondents smoked for the first time was 20 years old (n=26; 40.3%) , followed by 10-15 years old (17.9%) . In addition, an analysis of 67 undergraduates with a history of smoking revealed that the cause of their smoking was most commonly "the influence of friends," followed by "curiosity" and "influence of classmates and seniors." Although social understanding of the influences of smoking is spreading, it seemed that quite a few students began smoking because of the influence of friends or student life. In the future, along with smoking prevention education aimed at conveying the actual condition of tobacco and the effects of smoking, it may be necessary to clarify the importance of the surrounding environment on smoking behavior.

Key words: University student, Tobacco, Smoking, Smoking prevention education